

消費者世帯平均に比べて穀類，豆類等の植物性食品の消費割合が若干高いが，砂糖，油脂，動物性食品等の摂取量は若干低く，消費者世帯平均より多少劣っている。

い) その他の世帯

米の消費量は業態中最も少く 330.1g であるが，大麦の使用量は最も多く米の 21.3% (70.6g) を占めている。

また，いも類の消費も最も多く年平均 121.9g で，消費者世帯のおよそ倍量に及んでいる。動物性食品，豆類，油脂類は消費者世帯よりかなり低い，生産者世帯より上位にある。総じてその他の世帯は大麥，いも類の消費が多く，動物性食品に欠けた低い水準にあることがわかる。

3. 食品群別栄養構成 (熱量及び各栄養素の摂取比率)

前項までは各栄養素別摂取量とこれを裏付けている食品摂取量について記述してきたが，更に食品群別の熱量及び栄養素比率について検討すると次のとおりである。

1) 熱 量

熱量のうち穀類からの摂取は，第 12 図にみられるように 27 年は 75.2% であつたが，逐年僅少なから減少し，32 年には 72.2% となつた。この内訳をみると，米の占める割合はおよそ 57% で変りないが麦類が減少している。

油脂類からの熱量摂取率は，27 年の 1.6% が 32 年には 2.0%，動物性食品は 27 年の 7.2% が 32 年は 8.1% と若干向上している。

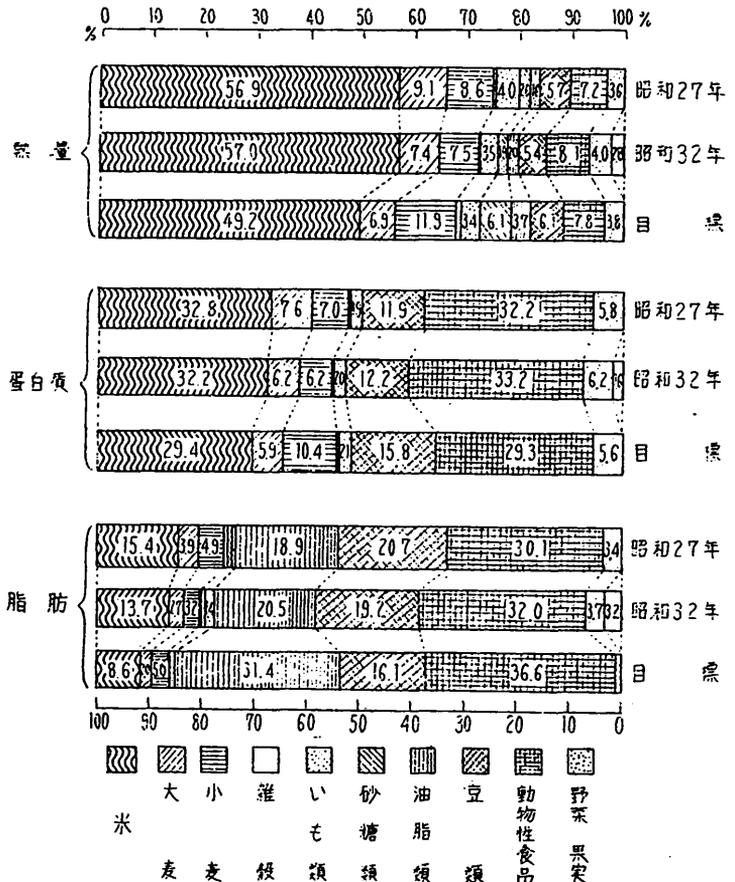
砂糖類の占める割合は前年より減つているが，これは食品分類に若干の変更があり，従来砂糖類に入つていたドロップ，キラメル，ヌガー，チョコレート，その他 50% 以上砂糖を含む菓子類を別に分類しているためである。

2) 蛋 白 質

蛋白質のうち，動物性食品からの

供給は年々向上し，第 12 図にみられるように，32 年には 33.2% を示し，最低基準である 30% を上回るまでにいたつたが，量的にはまだかなりの不足を示していることは前述のとおりである。

第 12 図 熱量，蛋白質，脂肪の食品群別摂取比率



注) 目標は昭和31年4月総理府資源調査会が策定した日本人の食糧構成表より算出したものである。

穀類からの摂取率は44.8%で(米は全量の32.2%)蛋白質のおよそ45%が穀類から摂取されている。なお、大麦、小麦の占める割合は若干減少している。

3) 脂 肪

脂肪は第12図にみられるように動物性食品からの摂取率が32.0%で最も高率で、次いで油脂20.5%、穀類20.1%、豆類19.2%、その他8.2%となっている。

なお、27年の構成からみると穀類からの摂取が減り油脂類が増加している。

業 態 別

業態別に食品群別栄養摂取率を検討すると、生産者世帯は消費者世帯に比べて植物性食品、特に穀類からの摂取率が高く食品の栄養的構成においてかなり劣位にあることがわかる。

1) 熱 量

生産者世帯においては第13図にみられるように植物性食品より93.7%摂取しているのに対し、消費者世帯は90.5%である。また、穀類からの摂取率は生産者世帯が74.6%、消費者世帯70.4%、また、いも類からの摂取も生産者世帯は高く4.2%であるが、消費者世帯は2.8%である。

次に消費者世帯では油脂類、動物性食品、果実からの摂取率が他業態より若干高く、その他の世帯ではいも類からの摂取率が若干高い。

2) 蛋 白 質

蛋白質のうち動物性食品からの摂取率は第13図にみられるように、生産者世帯28.4%、消費者世帯37.1%、その他の世帯32.5%で消費者世帯が優位を示している。

植物性食品からの摂取率を食品群別にみると、生産者世帯では穀類から48.7%、豆類から13.0%、野菜、果実類から4.9%と消費者世帯に比べてかなり高率で植物性食品特に穀類に対する依存度の高いことを示している。

3) 脂 肪

脂肪は第13図にみられるように動物性食品からの摂取が最も多く、生産者世帯28.3%、消費者世帯34.3%、その他の世帯32.3%で消費者世帯が高率である。

生産者世帯では油脂類から

の供給は19.4%で、穀類の23.6%より少ないが、消費者世帯では油脂21.5%、穀類16.9%で油脂類の占める割合が高い。その他の世帯では油脂類と穀類で同率である。

第13図 熱量、蛋白質、脂肪の食品群別摂取比率(業態別)

